

「あなたの家族は病気です。もう一人で動くことはできないでしょう。」

突然こう告げられたら、と考えたことはありますか。私の祖父は、私が五歳のときにがんを患いました。祖父は入退院を繰り返しながら、懸命に治療を行いましたが、私が七歳のとき亡くなりました。祖父は亡くなる直前の半年ほどを自宅で過ごしました。死期が近かったこともあり、祖父は自分の力で何かをすることが難しく、祖母が介護をしていました。飲み込むことが難しい祖父のために食べ物をすりつぶした食事を作り、祖父に食べさせたり、お風呂に入ることのできない祖父のために全身を拭いたり、祖母は一日中祖父の世話をしていた記憶があります。訪問看護の看護師が週に何度か訪問してくれましたが、祖母は毎日休む暇もなく介護をしていました。私はその頃まだ幼く、祖母の手伝いをすることはできませんでしたが、今私が祖母の立場になったらと思うと、とても不安な気持ちになります。

「ヤングケアラー」今、大きな社会問題となっています。ヤングケアラーとは、障害や病気などを抱えケアを必要としている家族を介護したり、家事や家族の世話などを行ったりする十八歳未満の子どもたちのことをいいます。その子どもたちの多くは勉強や部活、友達とのかかわりなど子どもとして皆が当たり前前にしていることができていないのです。子どもたちに与えられた当然の権利、その権利をもたない子どもなどこの世にいていいのでしょうか。以前私は、テレビで若い頃ヤングケアラーだった方について取り上げている番組を見ました。若い頃、とても苦労が多く、友達関係もあまりうまくいっていなかったとおっしゃっていました。その中でもその方が一番辛かったこと、それは周りに頼れる人が誰もいなかったことでした。自分がヤングケアラーという自覚がなく、友達や学校の先生に相談しようという考えも浮かばなかったそうです。しかし、大人になってからあの頃を振り返ると、誰かに相談できなかったことがとても辛かったとおっしゃっていました。私はその話を聞いて衝撃を受けました。そして、もし私がヤングケアラーという立場になったら、学習や部活、友達との関わりも十分にできない日々が続くことに、大きな不安や孤独でいっぱいになると思います。想像しただけでも、耐えがたい事実でした。

では、ヤングケアラーを支えるためにはどうすれば良いのでしょうか。今、

国や県が主体となり、ヤングケアラーを支援する様々な取り組みとして、相談窓口の設置や支援者の養成などが行われているそうです。山梨県では、全国で初めて「ヤングケアラーに特化した支援計画」というものが策定されたそうです。私は身近でこんなにもヤングケアラーを支援する取り組みが行われていることを知り、とても驚きました。そして、私には何ができるのだろう、と考えました。しかし、何度考えても、全く考えは浮かびませんでした。そこで、私は祖母と話をしてみました。祖母は当時祖父の介護の日々でしたが、病院のケアマネージャーや訪問看護の看護師さん、医療用器具の担当の方など多くの方に支えられていたと話していました。また、介護により祖母は友達と疎遠になってしまったようですが、友達が介護の状況を知り、いつも励ましの声をかけてくれていたそうです。私はその話を聞き、ハッとしました。ケアに追われ、不安な日々を送っている当事者が発信するのではなく、私たち周りの人間が気づくべきなんだ、そう思ったのです。互いを知る、それだけでもヤングケアラーを救う大きな一歩になるのではないか。これまでの私は、人のことを知ろうという気持ちがありませんでした。自分さえ良ければよいという甘えた気持ちがあったのかもしれませんが。そのことに気づいたとき、自分がとても嫌になりました。その日から私は、人のことをよく知るためにまずは色々な友達に声をかけてみることにしました。今まで、緊張をしてしまい自ら誰かに声をかけることに消極的でしたが、思い切って声をかけてみると、皆が笑顔で話をしてくれました。なんだか、皆と距離が縮まり、心が繋がったような気がして心が温かくなりました。

私は、再びヤングケアラーの子どもたちのために何ができるのかと考えてみました。

「おはよう、昨日のテレビ見た？」

もしかしたら、こんな些細な会話でもよいのかもしれませんが。まずは互いを知ることが大切なのではないか、私はそう思いました。互いを知り合い、気持ちに寄り添う日々の中で、友達を支え、助けることができるかもしれない。たった一言でも、少しのかかわりでも。支え合いによってみんなが安心して暮らせる世の中になることを願います。